

## <SINSE ReVIEW No.2 抄録>

### LUTEC1000 オーストラリアの超効率発電機 LUTEC社

<SINSE コメント> 実用機が間近かに出そうな雰囲気を持つ超効率装置の候補の一つとして、オーストラリアの超効率モーター発電機Lutec 1000を紹介する。「実用機が間近かに出そう」とは云っても、それは勿論大部分が発明者側のもたらす情報に基いてのことであることを断っておく。

Lutec 1000は2年ほど前からウェブ上で紹介され始め、その当時から今にもまずオーストラリア国内で市販が開始されそうな勢いがページ上の表現から感じられた。何ヶ月か後に、当初マイナーであると見なされていたが、実際にはかなり本質的なダブルに遭遇して、その解決に意外に手こずり、市販開始のスケジュールを大きく狂わせた。そして、それがいまだ未解決のまま、約2年近い時間が経過し現在に至っている。

この経緯を見ると、これまでの失敗例やまがい物に関してよく有るパターンを思わせるものがあり、またその類かという思いが頭をよぎる。しかし、この場合には次のような救いがある。それは、結果的に予約金などの形でマネーを受取っていないという一定の潔癖さ、一時広まったインチキではないかという噂に耐えて現在も意気軒昂に目標達成を目指す真摯な姿勢、それに加えてエンジニア的な誠実さが感じられることである。

利用価値という観点からは、1.4 m x 600cm x 600cm、100~120kgという寸法にやや大き過ぎると思わせる難点はあるものの、実際に1000ワットの超効率装置の実用化実現ということになれば勿論革命的価値があることは言を待たない。しかも、環境に対する柔しきは十分のようである。

Lutec 1000に関する状況の概略はこのようなものであるが、期待の度合を完全にゼロにすることなく見守ってよいと思える。以下に、Lutec 1000の内容を理解するために基本情報として、そのホームページの現行掲示内容の約70%に関する日本語版を以下に掲載する。アップデート情報などは次号以降に掲載予定。

### 固相回路超効率装置製作法 W. アレック

<抄録> 電氣的コイルを構成基盤とするフリーエネルギー的装置あるいは超効率装置をして、“正しい”動作を確実に行なわせるためには独特の理解が必要である。

そのような装置は、三つのカテゴリーに分類できる。第1のカテゴリーは、強磁性体(鉄合金)製コアを備える古典的コイルを用いるものであり、1より低いCOP(エネルギー生成性能係数)を特徴とする。第2のカテゴリーは、強磁性体コアに永久磁石による対抗方向およびまたは直角方向の磁場を適用するコイルであり、その特徴は、その値が1に極めて近いが1を超えないCOPを持っていることである。第3のカテゴリーは、強磁性体コアおよびまたは特殊な形状の永久磁石を独特に配置構成したものを用いるものであり、その作動には独特の条件が要求される。

本論文の目的は、これらの装置が余剰的電気エネルギーを生成する原因となっている、その内部で作用している“隠れた”メカニズムを明らかにすることである。

### デ・アキノの超低周波重力遮蔽 ティム・ベンチュラ

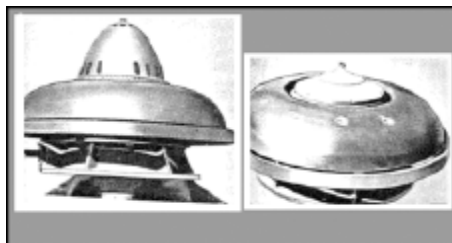
システムHは、通常家庭電気器具よりもやや大きい電力を使用して数百ポンドの重量を浮揚させることができる重力遮蔽技術であり、当初は潜在的に史上最大の技術革新的発明になることは間違いないと思われていた。しかし、その発表後3年が経過したが、数件ある彼の研究報告および実験報告の内容検証がなかなか捗らず、インターネット上の複数の研究コミュニティから「デ・アキノは、その実験を実際に行っていないのではないか」との疑いの声が出始めた。しかもその上、



彼自身の所在がまったくつかめない状態が続いている。システムHに対する政府筋による隠蔽活動の物語、および本日まで未解決状態を続ける一つの実験に関する謎の物語へこれからご案内したい。

## シャウバーガー装置の再来か？—第1部 ユージン・アルセンティエフ

<抄録> 本記事には、著者によって実際に設計された航空機エンジン(aircraft engine)に関する概要を記す。そのデザインは、必ずしもシャウバーガーのそれとまったく同一であるとは云えないかも知れないが、その考え方自体にはかなり人々の関心と呼ぶものがあると信ずる。異なる場所、異なる時間帯に住む人々が、同じような結論に至るということは、つまるところ人々の考え方にはそれ程違いはないということなのか、あるいは自然の法則が共通であるということであろう。著者がこの研究を開始する時点でシャウバーガーの研究成果に関する資料の存在を聞き及んでいなかった。したがって当然それら一切読んでいなかった。(この点は、読者各位に信じてもらえるかどうか懸念される点である。また、そのシャウバーガー研究成果とは、環境エネルギーで作動し、浮揚性能を持つエンジンのことを指している。)しかし、インターネットのお陰で偶然にもある日そのデザインに関する情報に出会い、シャウバーガーの考えと著者の仮説の間に非常に多くの点において共通点があることを知り驚いた。シャウバーガーのエンジンの外見は、下のようなものである(図1参照)：



## ブラウンガス特集1 ジョージ・ワイズマン

ブラウンガスに関する現行の理論によれば、「ブラウンガスは、水素および酸素に関する二原子体と単原子体の混合体である」と説明されている。ブラウンガス Book One には、そのことについて詳述されているが、ここではその要点にのみ触れる。ブラウンガスを作成するためのもっとも簡単な方法は、電解装置を用いて電気水で水をその構成元素である水素と酸素に分ける方法である。水が分離された直後の瞬間においては、水素と酸素は単原子状態にある。すなわち水素はHおよび酸素はOである。

通常の電解装置は、それらの水素および酸素がそれぞれ二原子状態に落ち着くことを奨励する。二原子状態とは、水素についてはH<sub>2</sub>、酸素についてはO<sub>2</sub>のことである。二原子状態はエネルギー的には低い状態であり、そのエネルギーの差が電解装置内において熱として現れる。この熱はその時点では炎には供給されない。

ところで、これらのHおよびO原子の中のかなり多数が二原子分子に再形成されないとした場合は、どうなるのか？電解法による水を分離するプロセスを442.4 Kcal/モルのエネルギーを加えて開始させる。これは、吸熱反応である。しかし、もし二原子分子への再結合プロセスがゼロまたは僅少であるならば、そのときは電解装置の温度は上昇しないであろう。なぜならば、気泡による流体の攪拌作用以外には余剰熱をもたらす発熱反応が存在しないからである。

その電解装置からは、通常の電解装置に関して合理的に予測される量を遥かに凌ぐ実質的にかなり大体積のガスが生成されるであろう。同じ重量の水が電解されて二原子分子になった場合に比べて、単原子分子は2倍の体積を占めるからである。

## NEWSコラム



渦動DCモーター リック・ハリソン

世界初の空気自動車 英国 ロスビジネス・コンサルティング